

櫛を伐った話・鹿足郡吉賀町抜月

令和3年10月19日

収録・解説・酒井 董美

イラスト・福本 隆男



語り手 田中ユリ子さん
(大正8年生まれ)
収録・平成4年8月26日

あらすじ

吉賀町抜月の櫛の話。昔、ヤク口鹿の骨を埋めたところ、生え、伐つてはならぬと言われていた。

昔、偉いお方だった親方さんが、
「月和田がああの木が目ざわりで見えん。蔭をするけえ、伐つてしまえ」と言われたので、木挽きたちが集まって伐り始めましたけれど、明るる朝、元通りになっていきます。三日伐つても、朝元通りになつていきますから、木挽きたちが恐れて、
「木を伐ることはやめさしてください。」と頼んだそうです。
親方さんは見張りを立てさせ。木挽きに櫛を伐らせました。

夜、見張りが見て、おますと、白い髪をして白い直垂を着たおじいさんたちが七人も出てきて、何とかおつづつ言いながら、コケラ(木の伐り屑)を拾ってひつつけています。明るる朝。木は元になっていました。

親方さんは非常に怒って、コケラを焼いて、夜も昼もい

つときも休まんこうに手斧を打ち込め」と命令したそうです。

親方さんの言われることなので、二日二晩伐り、三日目に伐り倒したので。そのときに、切株のどこから七人の直垂を着た小人が、煙のように出てきて、嘆いてどこかへ行つてしまいました。
コケラを焼いた人が夜見たら、七人の小人たちが、コケラの灰を、手へすくつて嘆いているそうです。

「許してつかあさい」と焼いた人が、家の中へ駆け込み具合が悪くなり血を吐いて死んだそうです。
それから雨が長く長く降り、上がつてから見たら、切株に芽が一尺ぐらいも伸びていたそうです。

木樵りに携わった人は三十人ぐらいたけれど、みな気がおかしくなり、苦しんで死んだりしてしまいました。そして、命令した親方さんはどうしたかといえ、夜も昼も、

「熱い熱い熱い熱い。わしを冷やせ」と言つて、水を飲ませると煮え湯のようになり、七日七夜も苦しむので、年寄りがお経をあげ、それから切株へは御幣を立ててお祭りをし

たそうです。親方さんは、「熱い、熱い」と言いながら、とうとう死んでしまわれましたが、身体は燃えさしのようになり、黒うなつておられたそうです。
ですから、いくら権力があつても、人がいけないと思つたときにはしてはいけません。お天道さまをまつすぐに見られるように生活しなければならぬのです。

解説

田中さんの話では、木を伐り倒す方法は親方の考えで行うことになっており、鳥や木の会話から知るといふ戸籍の原則からは少し距離がある。また、木の精ともいふべき直垂を着た七人の老人が現れたりなど、なかなか手の込んだ舞台装置が準備されていて、スケールの大きい話になっている点でも、戸籍からは離れているようである。

ところで、この話は鹿足郡吉賀町抜月地区にある櫛の話とはつきりと地名が述べられていない。このように事実あつたこととして語られている話は、民話の分類からいうと「伝説」なのである。

(元島根大学法文学部教授)

